

# 大分県豊後大野方言におけるイ主格

## —意味的・統語的制約(の不在)についての覚書—

金城 國夫

### 【要 旨】

大分県豊後大野市の方言では共通日本語のガ主格に加え、イ主格が使用されている。本稿では2022年に豊後大野市三重町、清川町で実施したイ主格に関するアンケート調査と面接調査の結果を報告する。調査により、現在でも70代以上の多くがイ主格を使用していること、イ主格には九州肥筑方言や琉球諸語の主格交替に見られるような意味的・統語的な制約が見られないことが明らかになった。

### 【キーワード】

大分方言 ガ主格 イ主格 格交替 意味的・統語的制約

## はじめに

大分県は江戸時代末期には40ほどの行政区画に分かれており、地理的な条件も重なって、方言の地域差も豊かな土地である(松田・日高 1996)。その多様性を象徴するのが主格助詞のバリエーションである。共通日本語のガ格に加えて、グ、ノ、ン、イと全国的にも珍しい多様な主格助詞が観察される。その中でも本稿で扱うのは主に現在の豊後大野市で話されている方言で使われるイ主格である。

イ主格の研究は三ヶ尻(1934/1937)に始まって以降、様々な文献・実地調査が行われてきたが、管見の限り切石(1991)や日高ほか(1996)を最後に調査が行われていない。これらの研究ではイ主格の方言話者の分布のみならず、接続する名詞にかかる音韻的な制約といった重要な事実が報告されている。こうした研究から、イ主格話者はガ主格も使用することが分かっているが、このような格助詞の交替現象には主語や述語の意味、それらが現れる統語的な環境といった要因が関わっていることが多く、言語類型論的にも重要なテーマの一つである(角田 1991/2009)。

本研究の目的は次の二つである。第一に、2022年現在、イ主格を使用する話者がどの程度存在するかを把握することである。その上で、従来報告されてこなかったガ主格とイ主格の選択に関する意味的・統語的な制約の有無について明らかにする。主に九州肥筑方言や鹿児島県甕島方言の主格ガ・ノ交替および琉球諸語の主格ガ・ヌ交替と比較し、これらの言語・方言で見られる主格交替の意味的・統語的制約が豊後大野方言のイ主格においても観察されるかどうかを調べた。調査の結果、イ主格にはそうした制約がないことが明らかになった。

本稿の構成は以下の通りである。1節では対象となるイ主格が使われている方言の概要をまと

め、2節でアンケート調査、3節で面接調査の結果をそれぞれ報告する。4節で調査結果のまとめと今後の課題を示す。

## 1. 対象方言の概要

本研究の対象とする大分方言は九州豊日方言に属している。さらに大分方言は音韻や文法の違いから下位区分が設けられる。ここでは代表的な例として、松田・日高 (1996) の5分類を挙げる (図1)。この見方によると、大分県の方言は別府市、由布市、日出町、竹田市北部、大分市中心部などを含む中部方言、国東市と佐伯市の一部 (旧南海部岸辺地域) などを含む東部方言、日田市や玖珠町西部、中津市南西部などを含む西部方言、豊後大野市、臼杵市、津久見市、竹田市南部、佐伯市西部などを含む南部方言、そして宇佐市、豊後高田市、杵築市、中津市北部などを含む北部方言に分けることができる。



図1：大分方言の下位区分  
(松田・日高 1996:17を元に作成)

この分類の主な根拠とされているのが、本稿の主題である主格助詞のバリエーションである。表1にあるように、5つの方言でそれぞれ異なる主格助詞の使用が見られる。

表1：大分方言における主格助詞の変異 (松田・日高 1996:19より)

共通日本語	ここに	白い	花が	ある
中部方言	コキー	シリー	ハナ <u>ガ</u>	アル
東部方言	コケー	シレー	ハナ <u>ン</u>	アル
西部方言	コキー	シロカ	ハナ <u>ノ</u>	アル
南部方言	コキー	シリー	ハナ <u>イ</u>	アル
北部方言	コキー	シリー	ハナ <u>グ</u>	アル

このうち、本稿で扱う主格助詞「イ」(本稿では「イ主格」とする)は南部方言で使用されている。図1では南部方言の分布地域が現在の豊後大野市全域と大分市、臼杵市、竹田市、津久見市、佐伯市の一部にまたがっているが、次節で概観する先行研究からも明らかのように、イ主格使用者の数は急速に減少してきており、分布範囲も大幅に縮小していると予想される。こうした事情から、本稿では対象方言を豊後大野方言と呼ぶことにする。

## 2. イ助詞使用者に関する予備的調査

本研究ではイ主格にかかる制約を調査する前に、イ主格が現在でも使用されていることを確認するためのアンケート調査を行った。本節ではこれまでに行われた主なイ主格に関する調査と、

筆者が2022年に実施した調査の概要をまとめる。ここではイ主格使用者の割合に焦点を当て、イ主格にかかる音韻的、語彙的制約については3節で改めて扱う。

## 2.1 先行調査

### 2.1.1 切石調査 (1952年～1989年)

イ助詞使用者数の推移を調査した代表的な研究として切石 (1989, 1991a, 1991b) が挙げられる。切石は1952年から1989年にわたり計4回の大規模調査を行った。調査ごとに対象地域は多少異なっているが、ここでは切石が「イ助詞使用の本場」と呼ぶ旧大野郡におけるイ主格使用者の推移をまとめる。

切石は主に中学生を対象として、1952年 (昭和27年)、1980年 (昭和55年)、1988年 (平成元年)、1989年 (平成2年) にアンケート調査を行っている。アンケートは共通日本語文を方言に翻訳するというもので、提示文としては末尾音と拍数が異なる主語を持つ文が20例程度使用されている (末尾音と拍数によるイ助詞の接続率の変化については3節で概説する)。中学生におけるイ助詞の使用者 (アンケートの回答項目で一つでもイ主格を使用しているもの) の推移をまとめたものが図2である。

1953年 (昭和27年) の第一次調査ではほとんどの地域で半数以上がイ主格を使用していたが、1980年代末 (平成元～2年) の第三次、四次調査では使用者がゼロになった地域 (三重町、緒方町、犬飼町) も多い一方、清川村や大野町では比較的多くの話者が保たれているのが分かる。<sup>1</sup>

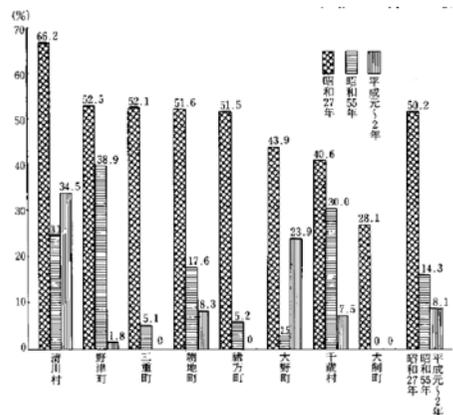


図2：イ主格使用者数の推移 (中学生)  
(切石 1991b:23より)

### 2.1.2 大分大学日高ゼミ調査 (1983年～)

日高ほか (1996) はイ主格の研究史に加え、大分大学の日高貢一郎ゼミで1984年から1994年の間に書かれたイ主格に関する卒業論文3本の内容をまとめたものである。それぞれ旧南海部郡、旧大野郡、旧北海部郡における調査であるが、ここでは旧大野郡で行われた萩原紀子氏による調査の結果を概観する。

1985年に実施された調査で、萩原は老年層 (60代、50人)、中年層 (30～40代、47人)、少年層 (中学生、48人) を対象に面接調査を行っている。共通日本語で書かれた例文を対象者の方言に翻訳させ、イ主格の出現率<sup>2</sup>をまとめた。図3がその結果である。<sup>3</sup>

老年層では大野郡の多くの地域でイ主格の使用が見られるが、中年層、少年層と年代が下るとつれてイ主格の出現率が下がっている。特に少年層ではイ主格の使用が激減しているのが分かる。

1 この図では昭和55年から平成元年・2年にかけて清川村と犬飼町でイ主格の使用者が増えているように見える。この点について切石は特に何も述べていないが、おそらくは対象者の選定や調査方法の問題であり、実際にイ主格使用者が増加したものではないと考えられる。

2 調査に使用した全例文の数をイ主格が出現した例文の数で割ったもの。切石の調査のようなイ主格「使用者」の割合ではないことに注意されたい。

3 萩原氏は対象格 (例：酒が飲みたい) におけるイ格の出現率についても調査しているが、ここでは割愛する。

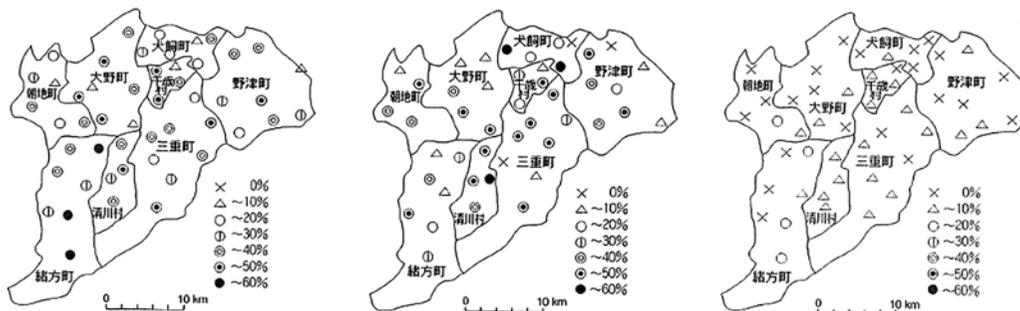


図3：萩原調査（1985年）におけるイ主格出現率  
（日高ほか 1996:18より）

## 2.2 本研究の調査

本研究の目的はイ主格使用者の全体像を把握することではないため、調査地点を2022年現在も比較的イ主格使用者が多いと予想される地点に絞り、対象も主に70～80代の高齢者層に限定して調査を実施した。先述した切石と萩原の調査でイ主格の使用割合や使用率が高かった旧清川村（現豊後大野市清川町）と旧三重町（現豊後大野市三重町）を調査地点とした。

調査は2022年7月から11月に、三重町と清川町の公民館等で行われている高齢者の集会でアンケート用紙を配布して実施した。図4が実際に使用したアンケートの一部である。年齢、出生地を記入したうえで、提示された「雨い降りよる（雨が降っている）」「誰いそげーなんもん食うか（誰がそんなもの食べるか）」という文について、①普段から使う、②使ったことがある、③自分では使わないが聞いたことがある、④使ったことも聞いたこともない、の4つの選択肢の中から回答してもらった。提示文はいずれも先行研究の中で実際に使用が確認されているものである。また、自由記述欄としてイ主格の例文を書く項目も設けた。

質問1：選択肢①～④の中で該当するものにマルをつけてください。

大野川流域の一部地域では、次のような方言が報告されています。

雨い降りよる（雨が降っている）

誰いそげーなんもん食うか（誰がそんなもの食べるか）

このような「○○い～する」という文を、

① 普段から使う。

② 使ったことがある。

③ 自分では使わないが使っているのを聞いたことがある。

④ 使ったことも聞いたこともない。

質問2：①～③と回答した方。思いつく限りで結構ですので、裏面に例文を書いて下さい。

図4：調査に使用したアンケート

質問に対して①または②に回答したものをイ主格使用者とみなし、その割合を出生地と年代別に表2としてまとめた。表中の数字は分母が有効回答数<sup>4</sup>、分子がイ主格使用者の数である。

4 出生地や年齢を記入しているが設問に回答していないものや、①～④すべてに丸をつけているものなどは除外した。

表2：年代・出生地別イ主格使用者の割合

年代	三重町	清川町	県南部 <sup>5</sup>	県中北部 <sup>6</sup> 、県外
50代	1/1 = 100%	0/0	0/1 = 0%	0/1 = 0%
60代	0/1 = 0%	0/0	0/0	0/0
70代	6/11 = 54.5%	2/3 = 66.7%	8/16 = 50%	0/3 = 0%
80代	7/12 = 58.3%	10/12 = 83.3%	1/4 = 25%	2/9 = 22%
90代	5/5 = 100%	2/3 = 66.7%	0/0	0/0
全体	19/30 = 63.3%	14/18 = 77.8%	9/20 = 45%	2/12 = 16.7%

先行研究から予想された通り、三重町と清川町の高齢者層は現在でもイ主格使用者の割合が高いことが分かる。両地点以外の県南部出身者にもイ主格使用者が見られた。9名のうち、3名が豊後大野市大野町、1名が同市緒方町、4名が臼杵市、1名が竹田市の出身であった。県中北部、県外でイ主格を使用すると回答した2名はそれぞれ日田市と東京出身で、現在はそれぞれ清川町、三重町在住である。幼少期に移り住んできたためイ主格を使用するようになった可能性があるが今回のアンケートではそうした居住歴までは把握しきれなかった。

### 3. イ助詞の分布にかかる制約

アンケート回答者のうち、イ主格使用者の数名から聞き取りを行い、イ主格の分布に関わる音韻的、意味的・統語的な制約について調査した。聞き取り調査の日程とそれぞれの調査対象者は表3のとおりである。

表3：面接調査日時・対象者

	調査日時	調査対象者
1	2022年7月	70代女性1名（清川町出身）
2	2022年10月	70代女性1名、80代男性4名（いずれも清川町出身）
3	2022年12月	80代女性1名（清川町出身）、70代男性（三重町出身）
4	2023年1月	80代女性1名、80代男性1名（いずれも清川町出身）

#### 3.1 音韻的制約

イ主格の分布にはガ主格とは異なる音韻的な制約があることは、上述した切石や萩原の研究で報告されている。第一に、一拍語の主語にはイ主格が容認されにくい。萩原の論文では二拍以上の語には老年層で50%近く、中年層で40%前後の割合でイ主格が出現しているのに対し、一拍語にはそれぞれ1%程度しか出現していないことが報告されている（日高ほか1996:20）。今回の聞き取り調査における容認度判断でもこの制約が確認された。

5 三重町と清川町以外の大分県南部地方。豊後大野市（緒方町、大野町）、佐伯市、竹田市、臼杵市。

6 日田市、由布市出身者。

(1) 二拍以上語

- a. アメイ フリヨル (雨が降っている)
- b. キョーハ サケガ ノミテーナー (今日は酒が飲みたいなあ)

(2) 一拍語

- a. ??テイ イテーナー (手が痛いなあ)
- b. ??チャイ ノミテーナー (茶が飲みたいなあ)

主格、対象格に関わらず、イ助詞は(1)のように二拍以上の語には接続可能であるが、(2)のような一拍語に接続させると容認性が下がり、ガを使うほうが自然というのが話者の一致した判断であった(面接調査2,4より)。

また、(3)のように一拍語に修飾語を付け、句として二拍以上になってもイ主格の容認性の低さは変わらないことも確認された。一方、同じ語でも(4)のように二拍以上の複合語にするとイ主格が容認されることから、この制約は句レベルではなく語の拍数にかかるものであると結論づけることができる。

(3) 修飾語+一拍語

- a. ??[リョーホーノ テ]イ イテーナー (両方の手が痛いなあ)
- b. ??[アツタケー チャ]イ ノミテーナー (暖かい茶が飲みたいなあ)

(4) 複合語

- a. ミギテイ イテーナー (右手が痛いなあ)
- b. リョクチャイ ノミテーナー (緑茶が飲みたいなあ)

第二の制約はイ助詞が接続する語の末尾音に関するものである。切石と萩原の研究で高母音([i][u])と撥音([n])で終わる語にはイ主格がつきにくいことが報告されている。再び萩原の調査結果を参照すると、老年層における[a][e][o]末尾語のイ主格出現率が50%程度なのに対し、[u]末尾語には8.5%、[i]末尾語には0%となっている。また、切石(1989)はアンケート調査と自然談話分析の両方で撥音にイ主格が後続する例が一つも無いことを報告している。

今回の面接調査では、撥音の調査は行っていないが、イ主格標示された高母音末尾語の容認性が低いことが改めて確認された。

(5) 高母音末尾語とイ主格の容認性

- a. ドン クラス??イ/ガ イジメイ/ガ オオイカノー  
(どのクラスがいじめが多いのかなあ)
- b. サンクミ??イ/ガ イジメイ/ガ オオイノー  
(3組がいじめが多いね)

(5)について、[u]末尾語(クラス)と[i]末尾語(サンクミ)にはガ格が自然でイ格はかなり不自然であるという判断が得られた(調査2より)。<sup>7</sup>

7 一拍語と高母音・撥音末尾語に接続しにくいという特性は大分県北部のグ主格でも報告されている(松田1991)。



主格標示された名詞の有生性を調べてみた。その結果が表4である。無生物主語の割合がかなり高いことが分かる。以下にそれぞれの出典から無生物主語の例文を挙げる。

表4：有生性とイ主格

無生物イ主格の数	イ主格の例文総数	割合
34	49	63.9%

- (8) モースグ ママイ ジェクルキー  
(もうすぐご飯ができるから) (切石 1989)
- (9) ハジムンノイ ヨーイナ シンクジャ ナカッタ  
(始めるのが容易な辛苦ではなかった) (松田・日高1996)
- (10) アタマイ イテー  
(頭が痛い) (本研究アンケートより)

これを受けて面接調査1、2では、「○○が××だ」という文の主語を代名詞(おれ)、固有名詞(花子)、親族名詞(娘)、人間普通名詞(医者)、動物(猫)、無生物(お城)にした文をそれぞれ話者に提示し、容認性を判断してもらった。その結果、予想に反して、提示した文のすべてでイ主格が容認可能であった。文献や談話資料で無生物主語の割合が多い理由については今後の検証が必要であるが、名詞の有生性そのものはイ主格の分布に影響を与えないようである。

### 3.2.2 他動性と連体修飾節

日本語のいくつかの方言で、主格助詞の選択と他動性(transitivity)の影響が指摘されている。他動性は述語やその述語の主語が持つ性質であり、述語の動作性、主語の動作主性、意志性など様々な意味的要素によって決定されるが(Hopper and Thompson 1980)、一般的には他動詞、意志自動詞、非意志自動詞の順に他動性が高いとされる。坂井(2018)や森・平塚・黒木(編)(2015)は熊本方言と鹿児島県甕島方言の主格助詞ノの分布が、他動性の低い節で広くなることを報告している。また、金城(2022)は沖縄語と奄美語のヌ主格において同様の傾向が見られることを論じている。

さらに主格助詞の選択に影響を与える要因として、主節と従属節という統語環境の違いが挙げられる。共通日本語においてガ主格とノ主格の交替は主節では主語の有生性や述語の他動性に関わらず許されないが、連体修飾節では可能である(Harada 1971等)。

- (11) 共通日本語におけるガ・ノ交替
  - a. 太郎がノの来た 主節
  - b. [太郎がノの来た]道 連体修飾節

金城(2022)は沖縄語と奄美語においても、ヌ主格の分布が主節よりも連体修飾節で広くなることを報告している。

本研究の面接調査ではこれら二つの要因がイ主格の容認性に与える影響についても調査したが、有生性同様、両者の間に関係性は確認されなかった。まず他動性であるが、同じ主語に対して述語の他動性を変化させた(12)のような文を提示し、イ主格の容認性を話者に確認した。

しかし、すべての文でイ主格が容認可能であり、他動性による影響は見られなかった。

(12) 他動性に関わらずイ主格は容認可能

- a. 猫がエサを食べた。 他動詞
- b. 猫が逃げた。 意志自動詞
- c. 猫が死んだ。 非意志自動詞

次に主節・連体修飾節の区別であるが、主節で容認性の低いイ主格が連体修飾節で高くなるというような例は見つからなかった。3.1節でイ主格が一拍語や高母音および撥音末尾語につきにくいという音韻的制約を見たが、こうした文の容認性は連体修飾に埋め込まれても変化しなかった。<sup>9</sup>

(13) イ主格の容認性は主節・連体修飾節で変化しない

- a. ??トモダチイ タクサン オル (i末尾主語、主節)  
(友達がたくさんいる)
- b. ??[トモダチイ タクサン オル]ヒト (i末尾主語、連体修飾節)  
(友達がたくさんいる人)

### 3.2.3 焦点化

九州肥筑方言のように、主語の焦点化の有無が主格助詞の選択に影響を与える方言もある。まず、以下の共通日本語文を見てみよう。

- (14) あつ、雨が降っているよ。 (中立叙述≒文焦点)
- (15) a. 昨日の会議には誰が欠席したの？  
b. 太郎が欠席したよ。 (総記≒主語焦点)

(14)、(15) は久野 (1973) がそれぞれ中立叙述文、総記文と呼んだ文であるが、やや単純化して言えば、前者は文全体に、後者は主語に焦点が当たった文といえることができる。吉村(2006)は熊本方言において、文焦点の文ではノ主格、主語焦点の文ではガ主格が使用されると論じている。

本研究では豊後大野方言でも同様の傾向が見られないか調査を行った (面談調査2、3)。提示した文焦点と主語焦点の例を以下に示す。

- (16) Bが新聞を読んでいるところにAが話しかける  
A：どうしたの？  
B：市役所が今週から工事中らしいよ。 文焦点
- (17) A：清川ってどこが有名なの？  
B：宝生寺と神楽が有名だよ。 主語焦点

9 逆に、連体修飾節では容認可能なイ主格が主節で容認度が下がるというような例も見つからなかった。

こうした例を豊後大野方言に翻訳してもらい、イ主格の容認性を確認した。その結果、両方もイ主格が容認可能であり、両者の容認性に大きな違いは無い、という回答であった。焦点化の有無もイ主格の容認性に影響を与えないようである。

### 3.2.4 ゼロ主格優勢文とイ主格

日本語の話し言葉ではしばしば格助詞が使用されない場合がある(例:あ、太郎\_\_来た)。こうした文を格助詞の省略と見なす立場がある一方(久野 1973等)、「無助詞格」や「ゼロ格」として他の格助詞と対立するものとしてみなす立場も存在する(三枝 2005等)。後者の立場を支持する根拠として、無助詞のほうが他の格助詞や主題化助詞「ハ」をつけた場合よりも自然な例の存在がある。例えば次のような例である。

(18) あの花\_\_かわいいね。

(19) (酒屋さんで店主に向かって) 焼酎\_\_ある？

三枝(2005)は、このようなゼロ格が優勢な文の特徴として次のような特徴を挙げている。上記の(18)、(19)はそれぞれ(20b)、(20c)に該当する。

(20) ゼロ格優勢文

- a. 話し手、聞き手双方に明らか、もしくは、そう想定される指示代名詞、人称代名詞類を持つ文
- b. 指示代名詞に準ずる、話し手、聞き手双方に明らか、もしくは、そう想定される事物を持つ文
- c. 現象文を否定文、疑問文にしたもの
- d. 意志・依頼・命令文

本研究では共通日本語において主格がゼロ標示されやすい文でイ主格が許容されるかどうか調査した(面接調査4)。

(21) 提示したゼロ主格優勢文

- a. これ\_\_とっても便利だよ。
- b. 今日は俺\_\_うなぎ食べたい。
- c. あの花\_\_かわいいね。
- d. しまった、今日はお店\_\_休みだ。

結果、こうしたゼロ主格優勢文では、イ主格の容認度も低いことが分かった。ここでもが主格とは異なるイ主格の分布は確認されなかった。

## 4. まとめと今後の課題

本稿では大分県豊後大野方言におけるイ主格について実施したアンケートと面接調査の結果を報告した。アンケート調査の結果、豊後大野市三重町および清川町では2022年現在も主に70代以上の話者を中心にイ助詞が使用されているということが明らかになった。

面接調査ではガ主格とイ主格を区別する制約について検証した。以下にガ主格とイ主格にかかる制約をまとめる。先行研究で指摘されている音韻的制約（太字部分）は確認されたが、九州肥筑方言や琉球諸語の主格交替に見られるような意味的・統語的な制約は見られなかった。

表5：ガ主格とイ主格の比較

	ガ主格	イ主格
一拍語	接続できる	接続できない
高母音・発音末尾語	接続できる	接続できない
助詞の強調	できる	できない
名詞の有生性	影響なし	影響なし
他動性	影響なし	影響なし
主節・従属節	どちらでも使用可能	どちらでも使用可能
焦点化	影響なし	影響なし
ゼロ格優勢文	出現しない	出現しない

今回は対象地域を三重町と清川町に、対象年齢を主に70代以上に絞ってアンケート調査を行ったが、今後はより対象地域と年齢を拡大し、イ主格話者の実態をより正確に把握する必要がある。特に表2で「県南部」とひとくくりにした地域には現在でも多くのイ主格使用者が存在することが予想されるため、よりきめの細かい調査が必要である。また、大分県内の他地域におけるガ以外の主格（グ、ノ、ン）でもやはりイ主格と同様にやはり意味的・統語的な制約が存在しないのかについても今後の研究課題としたい。

## 謝辞

アンケート配布に協力していただいた豊後大野市役所高齢者福祉課、アンケート調査及び聞き取り調査にご協力いただいた話者の方々に心より御礼申し上げます。なお、本研究は筆者が指導教官を担当した野邊実海氏の卒業論文として別府大学文学部に提出された内容を一部含んでいる。また、本研究の一部はJSPS研究費22K00545「北琉球語における複文の構造と意味—格配列と焦点化構文を中心に」の助成を受けている。

## 参考文献一覧

- 内間直仁・新垣公弥子（2000）『沖縄北部・南部方言の記述的研究』風間書房  
 切石文士（1989）「大分県方言にみる主格助詞「イ」の研究」『別府大学短期大学部紀要』8.1-42.別府大学短期大学部  
 切石文士（1991a）「主格のイ助詞」『大分県史方言篇』284-304. 大分県  
 切石文士（1991b）「主格助詞「イ」の分布について」『別府大学短期大学部紀要』10.19-27.別府大学短期大学部  
 金城國夫（2022）「北琉球語における主格助詞ga/nuと節のタイプ」『琉球の方言』45.71-94.法政大学沖縄文化研究所  
 久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店  
 三枝令子（2005）「無助詞格：その要件」『一橋大学留学生センター紀要』8.17-28.一橋大学留学生センター  
 坂井美日（2018）「九州方言における主語標示の使い分けと動作主性」『日本語学会第156回大会予稿集』

- 猿渡翌加 (2019) 「長崎方言における属格主語」『大阪工業大学紀要』64 (2). 53-63. 大阪工業大学
- 角田太作 (1991/2009) 『世界の言語と日本語－言語類型論から見た日本語』くろしお出版
- 日高貢一郎・大塚滋子・萩原紀子・疋田尚子 (1996) 「大分県方言における「イ助詞」の実態」『国語の研究』23.  
大分大学国語国文学会
- 松田美香 (1991) 「主格のグ助詞」『大分県史方言篇』305-314.大分県
- 松田正義・日高貢一郎 (1996) 『大分方言30年の変容』明治書院
- 三ヶ尻宏 (1934/1937) 『大分県方言の研究』朋文堂
- 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦 (編) (2015) 『甕島里方言記述文法書』国立国語研究所
- 吉村紀子 (2006) 「熊本八代方言から日本語を見る：主格の「が」・「の」をめぐって」『Scientific approaches to language』5.195-211.神田外語大学
- Harada, Shin-ichi (1971) Ga-no conversion and idiolectal variations in Japanese. *Gengo Kenkyuu* 60.25-38.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56.251-299.
- Shimoji, Michinori (2010) Ryukyuan languages: An introduction. In Michinori Shimoji and Thomas Pellards (eds.) *An introduction Ryukyuan languages*. Tokyo: ILCAA.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In R.M.V Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian National University.

## 欧文要旨

It has been reported that the nominative particle *i*, as well as the predominant *ga*-nominative, is used in the Bungo Ohno dialect in Oita Prefecture. This paper reports the results of a questionnaire and interview survey on the use of the *i*-nominative conducted in the Mie and Kiyokawa regions in 2022. The survey revealed that many speakers in their 70s and older still use the *i*-nominative, and that the *i*-nominative lacks semantic/syntactic restrictions that are observed in the Hichiku dialects of Japanese and some of the Ryukyuan languages.